

資 料 看護学実習における評価尺度に関する文献検討

小松崎記妃子^{*1,2)} 山田真実子^{1,3)} 福宮 智子^{1,4)}
佐藤 陽子^{1,3)} 山崎 あや³⁾ 渡辺 純子^{1,5)}
福地本晴美^{1,6)}

抄録：看護学生による臨地実習に関する評価尺度の動向を明らかにする。本研究は、臨地実習での教授者の教育能力および学生の看護実践能力の両側面の能力を評価するための資料とする。医中誌 Web Ver.5を用いて、検索対象年は2005年1月～2015年9月、検索式は「臨地実習」and「看護学生」and「評価」とし原著論文に限定した。その中から看護学実習に関して尺度を用いた評価を行っている文献（独自質問紙のみを使用した文献は除外）を分析対象とした。検索の結果、1,132件が抽出された。このうち本研究の条件に該当する文献は73文献あった。使用されている評価尺度は55種類あり、1文献に対し1～11の尺度を用いるなど多岐にわたっていた。評価者は、教員、指導者、学生の3つに分類でき、評価対象は、教員、指導者、学生、実習過程（実習全般）、実習環境の5種類に分類できた。人を評価対象とした文献のなかで、教員を評価した文献は4件で最も少なく全て2011年以降に確認された。指導者を評価した文献は20件、学生を評価した文献は45件あり、2005年から確認できた。教員を評価対象とした文献のうち、その評価者は、学生3件、教員（自己評価）1件であり、評価尺度は、前者は全て日本語版 Effective Clinical Teaching Behaviors（以下 ECTB）、後者は教授活動自己評価尺度—看護学実習用—が用いられていた。指導者を評価対象とした文献における評価者は、学生14件、指導者（自己評価）6件であった。評価尺度は、前者のうち11件が ECTB、3件が授業過程評価スケール—看護学実習用—であり、後者は全て ECTB が用いられていた。近年の看護学実習における教育評価に関する研究では、教授者の教育実践能力を評価する尺度には、授業過程評価スケール—看護学実習用—や ECTB の共通性が確認されたが、教員を評価対象とした研究は僅かであった。また、評価の時期は、基礎実習後と領域実習の前後などで2時点から3時点で実施されており、基礎看護実習から全ての実習終了後までなど一連の過程を通じた学生の評価に関する研究は見当たらなかった。看護実践能力における要素別の評価尺度を組み合わせることで実習を評価していることが明らかになった。

キーワード：看護学、実習、評価指標

はじめに

2011年に発表された厚生労働省の「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」¹⁾では、「学生の实践能力を高めるためには臨地実習の指導体制の充実が重要である」と述べられている。また、「教員

及び実習指導者の指導能力の向上のためには教育方法の見直しについて組織的かつ定期的に取り組めるような仕組みを設けることが必要である」と提言されている。

当大学では「病院実習の充足を図り、効果的な卒前・卒後教育を展開すること」を目的として2012

¹⁾ 昭和大学保健医療学部看護学科

²⁾ 昭和大学藤が丘病院看護部

³⁾ 昭和大学病院看護部

⁴⁾ 昭和大学病院附属東病院看護部

⁵⁾ 昭和大学烏山病院看護部

⁶⁾ 昭和大学江東豊洲病院看護部

*責任著者

〔受付：2016年11月29日、受理：2020年6月22日〕

年から臨床教員制度を導入しており、現在は試行錯誤の段階にある。臨床教員が病院実習に関与することで学生の実習能力の向上に寄与できるなど、一定の成果を見込んでいるが、成果および臨床教員自身の教育能力向上に向けての課題を明らかにするためには何らかの評価指標が必要である。

そこで、実習における教育能力向上に向けた取り組みを行うにあたっては、その評価を行うための何らかの評価尺度が必要である。国内の看護学実習における教育評価に関する研究について、阿部²⁾は、2009年までの5年間で急速に進んでいること、評価の客体が教員である研究はわずかであったことなどを明らかにしている。しかし、2010年以降の文献を対象としたものは確認できず、また具体的な評価尺度に焦点をあてて検討したものは過去に見当たらない。そこで本研究では、近年の看護学実習における教育評価に関する研究のうち、主に評価尺度に焦点をあてて動向を明らかにしたので報告する。

目 的

看護学生による臨地実習に関する評価尺度の動向を明らかにする。本研究は、臨地実習での教授者の教育能力および学生の看護実践能力の両側面の能力を評価するための資料とする。

研究 方法

方法は、既存研究から探索する文献レビューである。検索データベースには医中誌 Web Ver.5を用いた。検索対象年は2005年1月～2015年9月、検索式は「臨地実習」and「看護学生」and「評価」とし原著論文に限定した。また、これら抽出された文献のうち独自で作成した尺度やアンケートを使用した文献は除き、評価者が学生や教員、実習指導者とした文献を条件として抽出し本研究の対象とした。対象となった文献について発表年等の基本情報の傾向を記述するとともに、評価者と評価対象別に文献数および評価尺度についてまとめた。

分析について、これらの対象文献を十分に読み、研究目的とデザイン、調査内容を整理した。次に、結果と考察について、高瀬ら³⁾が分類した看護実践能力の3要素に基づいて分別し、評価尺度の内容に応じた評価対象と評価者や評価の時期を確認した。考察と結論については、看護学実習における教員の

教育評価や看護実践能力の方向性について確認した。

倫理的配慮

著作権を侵害しないよう文献の出典を明記した。

結 果

1. 看護学実習における教育評価に関する文献の概要と年次推移

検索の結果、1,132件が抽出された。このうち本研究の条件に該当する文献は73文献あり、対象とした文献の概要を表1に示した。発表年別の文献数は、平均6.6件であり、2006年が10件で最も多く、ついで2009年、2010年の順であった。経年推移による目立った傾向は認めなかったが、2012年～2014年が4件で最も少なかった。

2. 評価尺度の種類と特徴

73文献中、使用されている評価尺度は55種類であった。学生の視点から実習の質を評価し、実習過程の改善に役立てることを目的としている『授業過程評価スケール—看護学実習用—』⁴⁾を使用している文献が15件あり、学生が実習過程を評価している文献が14件、指導者が実習過程を評価している文献が1件あった。学生が実習環境を評価した文献は1件あり、実習環境の対人的、物理的、組織的な環境から評価することを目的とした『Clinical learning environment scale (以下 CLES)』が用いられていた。また、効果的な実習指導行動を評価することを目的とした『日本語版 Effective Clinical Teaching Behaviors (以下 ECTB)』を用いている文献は3件あり、学生が教員を評価していた。また、教授活動自己評価尺度—看護学実習用—を用いている文献では、教員が自己評価をしていた。

3. 評価対象別の評価者および評価尺度

評価者は、教員、指導者、学生の3つに分類でき、評価対象は、教員、指導者、学生、実習過程(実習全般)、実習環境の5種類に分類できた。なお、評価対象が複数に及んでいた文献が11件みられた。これらを延べ数でまとめ表2に示した。

教員を評価対象とした文献のうち、その評価者は、学生3件、教員(自己評価)1件であり、評価尺度は、前者は全てECTB、後者は教授活動自己評価尺度—看護学実習用—が用いられていた。

指導者を評価対象とした文献における評価者は、

看護学実習における評価尺度に関する文献検討

表 1 対象文献の概要

文献 番号	著者 (発表年)	論文題目	出典	評価者*	評価 対象**	尺度名
1	水落ら (2015)	看護学生の精神看護学実習前後における自律性の変化	日本看護学会論文集： 精神看護	A	A	看護師の自律性測定尺度
2	小倉ら (2015)	A 大学の母性看護学実習前における学生の自律的欲求・仮想的有能感・学習の動機づけの特徴と男女比較	中京学院大学看護学部紀要	A	A	自律性欲求尺度, ACS2, 自律感情尺度, 学習動機づけ尺度
3	吉川ら (2015)	実習領域の違いによる実習指導の特徴と今後の課題 学生による成人看護学実習と在宅看護論実習の実習指導評価の比較から	日本看護学会論文集： 看護教育	A	B/C	ECTB
4	水落ら (2015)	看護学生の精神看護学実習前後における対人関係能力の変化	日本看護学会論文集： 看護教育	A	A	社会的スキル尺度
5	廣田ら (2015)	看護大学1・2年次生の実習終了後のコミュニケーション力の現状と課題	日本看護学会論文集： 看護教育	A	A	看護職としての必要なコミュニケーション力チェックリスト
6	伊藤ら (2015)	母性看護学実習における実習環境の質向上へ向けて 学生と指導者双方の授業過程評価を通しての一考察	日本看護学会論文集： 看護教育	A/B	D	授業過程評価スケール
7	合田ら (2015)	小児看護学実習における看護学生の自己効力感と実習指導評価との関連	香川県立保健医療大学雑誌	A	A/B/C	GSES, ECTB
8	中田ら (2014)	看護師養成所3年課程の実習指導における学生への教員の教授活動の実態 教員の教授活動自己評価の結果分析	中国四国地区国立病院附属 看護学校紀要	C	C	教授活動自己評価尺度 —看護学実習用—
9	山本ら (2014)	日本語版 ECTB を用いた成人看護学実習の実習指導評価 看護学生と実習指導者、実習指導者の役割による比較から	千里金蘭大学紀要	A/B	B	ECTB
10	吾妻ら (2014)	看護学生のアサーティブネスの実態 基礎看護学実習でアサーティブになれなかった状況と実習後のアサーティブネス得点からの考察	日本保健福祉学会誌	A	A	日本語版 RAS
11	奥井ら (2014)	看護学生の臨床実習におけるレジリエンスの変化と困難および支えの関連	日本看護学教育学会誌	A	A	精神的回復力尺度
12	中島ら (2013)	「シャイネス（対人不安）」と「精神看護学実習の学び」の関連	福岡女学院看護大学紀要	A	A	早稲田シャイネス尺度
13	山本ら (2013)	基礎看護学実習における看護学生の実習過程と実習環境に対する評価 基礎看護学実習と成人看護学実習の比較から	千里金蘭大学紀要	A	D/E	授業過程評価スケール, Clinical learning environment scale
14	川瀬ら (2013)	実習指導者の役割行動・指導意欲と組織風土との関連	日本看護学教育学会誌	B	B	ECTB, MSQ, Nurse Organizational Climate Questionnaire
15	武田ら (2013)	実習体験が看護大学生の保健・看護職としての成長におよぼす要因	地域と住民	A	A	社会的スキル尺度, ACS, 看護実践力尺度
16	富澤ら (2012)	臨地実習を通じた看護学生の学びの評価と A 病院における実習過程評価	千里金蘭大学紀要	A	D	授業過程評価スケール
17	直成ら (2012)	成人看護学実習の学生による評価 授業過程評価スケール（看護学実習用）を用いて	茨城キリスト教大学 看護学部紀要	A	D	授業過程評価スケール
18	濱松ら (2012)	実習時間数の減少に伴う看護学生の実習指導評価 成人看護学実習（慢性期・終末期）への影響	川崎医療短期大学紀要	A	B	ECTB

(表1 つづき)

19	五十嵐ら (2012)	実習指導体制の看護学生による評価	大崎市民病院誌	A	D	授業過程評価スケール
20	園田ら (2011)	実習前演習の評価	鹿児島純心女子大学 看護栄養学部紀要	A	A	自己効力感尺度
21	藤堂ら (2011)	学生による成人看護学慢性期・終末期 の実習指導評価	川崎医療短期大学紀要	A	B/C	ECTB
22	岡田ら (2011)	基礎看護学実習Ⅱにおける実習過程に 伴う看護学生の思い 達成動機が高 まった学生を対象とした調査から	川崎医療短期大学紀要	A	A	達成動機測定尺度
23	道廣ら (2011)	看護大学生の臨地実習での学びと学習 意欲・ホープとの関連	インターナショナル Nursing Care Research	A	A	日本語版ホープ尺度, 学習 意欲尺度
24	遠藤ら (2011)	基礎看護学実習Ⅱが看護学生の思いや り行動と看護職アイデンティティに及 ぼす影響	獨協医科大学看護学部紀要	A	A	思いやり行動評価尺度, 職 業的アイデンティティ尺度
25	内田 (2011)	臨地実習における看護学生の実習適応 感	神奈川県立保健福祉大学 実践教育センター 看護教育研究集録	A	A	実習適応感尺度
26	三木ら (2011)	2年課程定時制看護専門学校生の社会的 スキルと領域看護学実習における学 習活動の関連	日本看護学会論文集: 看護教育	A	A	社会的スキル尺度, 学習活 動自己評価尺度—看護学実 習用—
27	奈良 (2010)	看護学生のコミュニケーション技術教 育の効果と問題点	弘前医療福祉大学紀要	A	A	コミュニケーション技術評 価スケール
28	影本ら (2010)	看護学生による臨地実習指導の評価 学生の特性に焦点をあてて	川崎医療短期大学紀要	A	B	ECTB
29	高島ら (2010)	成人看護学臨地実習における看護学生 のストレスの縦断的变化 心理的スト レス指標と生理的ストレス指標から	日本看護研究学会雑誌	A	A	臨地実習用認知的評価質問 紙日本語版, 日本語版首尾 一貫感覚尺度
30	黒髪ら (2010)	講義および実習前後の看護学生の精神 障がい者に対する認識の変化	日本精神科看護学会誌	A	A	社会的距離調査票
31	田邊ら (2010)	精神看護学臨地実習前後における対人 関係能力の変化	新潟大学医学部 保健学科紀要	A	A	社会的スキル尺度
32	飯室ら (2010)	老年看護学療養病院実習における学生 到達度および臨床実習指導者の指導内 容の評価 2年目の学生指導方法の取 り組みによる評価	東海大学医療技術短期大学 総合看護研究施設論文集	A/B	B	ECTB
33	佐藤ら (2010)	母性看護学実習過程の評価 授業過程 評価スケール (看護実習用) を用いて	三育学院大学紀要	A	D	授業過程評価スケール
34	渡辺ら (2010)	授業過程評価スケール 看護学実習用を 用いて行う実習指導に対する学生評価	日本看護学会論文集: 看護教育	A	B	授業過程評価スケール
35	横島ら (2009)	老年看護学実習における学生指導のあ り方に関する研究 療養病院での学生 の実習到達度と臨床実習指導内容にお ける学生・臨床実習指導者評価の比較 から	東海大学医療技術短期大学 総合看護研究施設論文集	A/B	B	ECTB
36	合田ら (2009)	看護学生の臨地実習指導の評価 入学 定員増加によってもたらされた変化	川崎医療短期大学紀要	A	B	ECTB
37	渡部 (2009)	【SAT 法を通じたその人らしいキャリ ア形成】SAT 法を用いた看護学生の キャリア教育 看護学実習前後の介入 効果	ヘルスカウンセリング学会 年報	A	A	心理尺度計 11 種類 (対人依 存型行動特性尺度, STAI, SDS)
38	松清 (2009)	基礎看護学実習に対する学生評価から みる教授活動への課題	柳川リハビリテーション学院・ 福岡国際医療福祉学院紀要	A	D	授業過程評価スケール

看護学実習における評価尺度に関する文献検討

(表1 つづき)

39	霜田 (2009)	川柳作成による看護実習生の心理的ストレス反応の軽減	埼玉医科大学短期大学紀要	A	A	POMS, 大学生用ストレス自己評価尺度
40	蓑田ら (2009)	基礎看護学実習Ⅰにおける授業過程評価 舟島による「授業過程評価スケール 看護学実習用」	四日市看護医療大学紀要	A	D	授業過程評価スケール
41	末永ら (2009)	新生児モデル育児疑似体験を通しての母性看護実習の効果に関する研究	日本看護学会論文集：看護教育	A	A	対児感情評価尺度
42	花田ら (2009)	看護実習指導者の卒後年数に焦点をあてた実習指導評価の分析	日本看護学会論文集：看護教育	A/B	B	ECTB
43	渡辺ら (2009)	精神看護学実習が看護学生にもたらす心理的变化 アイデンティティ尺度を活用して	日本看護学会論文集：精神看護	A	A	アイデンティティ尺度
44	飯島ら (2008)	自己効力感および職業レディネスによる看護大学生の看護管理実習の効果の評価に関する研究	愛知県立看護大学紀要	A	A	GSES, 進路選択に関する自己効力感尺度, 職業レディネス尺度
45	影本ら (2008)	成人看護学慢性期・終末期の実習指導の分析 ECTB 評価スケールを用いて	川崎医療短期大学紀要	A/B	B	ECTB
46	久保園ら (2008)	精神看護学実習における看護学生の実習過程の評価 「授業過程評価スケール 看護学実習用」による分析	日本精神科看護学会誌	A	D	授業過程評価スケール
47	原田ら (2008)	看護短期大学における学生の自尊感情の変化に関する縦断的研究 臨地実習各期の自尊感情測定を通して	日本赤十字看護学会誌	A	A	自尊感情測定尺度
48	野戸ら (2008)	本学における成人看護学実習評価 学生による実習評価から	弘前大学大学院保健学研究科紀要	A	D	授業過程評価スケール
49	西田ら (2008)	自己効力感を向上させる精神看護学実習プログラムの検討	日本看護学会論文集：看護教育	A	A	GSES
50	島田ら (2008)	母性看護実習における教育効果 帝王切開分娩見学の意義を検討して	富山大学看護学会誌	A	A	母性理念質問紙
51	近村ら (2007)	看護臨床実習におけるストレスとコーピングおよび性格との関連	広島大学保健学ジャーナル	A	A	コーピング特性簡易尺度, STAI
52	中村ら (2007)	看護学生のコミュニケーションスキル育成に関する研究 (第1報) コミュニケーションスキルと自我状態との関連	日本看護医療学会雑誌	A	A	自己評価尺度
53	坂本 (2007)	実習指導に対する学生評価 実習評価スケールを用いた学生アンケートからの考察	奈良県立三室病院看護学雑誌	A	B	授業過程評価スケール
54	山本ら (2007)	臨地実習直前における看護学生の精神的健康状態 日本版 Self-rating Depression Scale を用いた検討	和歌山県立医科大学保健看護学部紀要	A	A	自己評価式抑うつ度尺度
55	渕野ら (2007)	基礎看護実習Ⅱの実習前・後における看護学生の思考動機の実態	福岡県立大学看護学研究紀要	A	A	日本語版思考動機尺度
56	南ら (2006)	成人看護学実習における学生の自己教育力に影響する要因の検討	鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要	A	A	自己教育力尺度
57	舟越ら (2006)	看護学生の自己効力感と小児看護学実習前の自己評価との関連	香川県立保健医療大学紀要	A	A	GSES
58	山川ら (2006)	精神科閉鎖病棟実習における学生の不安と目標到達度及び学習満足度との関連	日本看護学会論文集：看護教育	A	A	STAI
59	井澤 (2006)	回復期リハビリテーション実習における課題 実習終了時の学生評価より	東京厚生年金看護専門学校紀要	A	D	授業過程評価スケール

(表1 つづき)

60	柴田ら (2006)	看護学生の実習適応感に関する研究 (第4報) 愛着パターン別実習適応感 の特徴	群馬パース大学紀要	A	A	社会的スキル尺度, 実習適 応感尺度, 職業未決定尺 度, 内的作業モデル尺度
61	高橋ら (2006)	看護学生の実習適応感に関する研究 (第3報) 実習適応感に影響を与える 要因の分析	群馬パース大学紀要	A	A	社会的スキル尺度, 実習適 応感尺度, 職業未決定尺度
62	柴田ら (2006)	看護学生の実習適応感に関する研究 (第2報) 実習適応感と関連要因の学 年比較	群馬パース大学紀要	A	A	社会的スキル尺度, 実習適 応感尺度, 職業未決定尺 度, 内的作業モデル尺度
63	高橋ら (2006)	看護学生の実習適応感に関する研究 (第1報) 尺度作成の試みと信頼性・ 妥当性の検討	群馬パース大学紀要	A	A	社会的スキル尺度, 実習適 応感尺度
64	マイマイティら (2006)	臨床実習直前指導が看護学生の職業的 アイデンティティに及ぼす影響	茨城県立医療大学紀要	A	A	看護学生用職業的アイデン ティティ尺度, 授業メッ セージ尺度
65	中山ら (2006)	看護学生の長期実習前後の心理変化と 実習成績の関連に関する研究	昭和医学会雑誌	A	A	STAI, LOC, 対人・達成 領域別ライフイベント尺度
66	大西ら (2005)	問題基盤型学習 (PBL-tutorial) と従来 型学習の効果比較 学生の自己評価に 基づく臨地実習前後の変化	日本赤十字武蔵野短期大学 紀要	A	A	LOC, 看護師の自律性測定 尺度, CT 能力の自己評価 尺度
67	三浦ら (2005)	小児看護学実習における看護技術の自 己評価と自己効力感の関連	日本看護学会論文集: 小児看護	A	A	GSES
68	三輪田ら (2005)	臨地実習終了時における看護学生の実 習過程に対する評価 舟島の授業過程 評価スケールを用いた3年課程・2年 課程の学生アンケート調査からの考察	大阪医科大学附属 看護専門学校紀要	A	D	授業過程評価スケール
69	斉藤ら (2005)	ICUの臨地実習指導に対する学生評価	日本看護学会論文集: 看護教育	A	B	授業過程評価スケール
70	平野ら (2005)	母性看護学実習における学生の自己効 力感を高める要因に関する研究 (第2 報) 学生による授業過程評価との関連	日本看護学会論文集: 看護教育	A	A/D	自己効力感尺度, 授業過程 評価スケール
71	半貫ら (2005)	看護学生の安全に関する意識調査	日本看護学会論文集: 看護教育	A	A	安全意識に関する意識尺度
72	大浦ら (2005)	成人看護学実習に対する学生評価 実 習指導体制の変更による影響の検討	日本看護学会論文集: 看護教育	A	D	授業過程評価スケール
73	大山ら (2005)	看護学生の臨地実習における態度に関 連する要因と体験による変化の分析 (第2報) 首尾一貫感覚 (SOC: Sense of Coherence) との関連	日本看護学会論文集: 看護教育	A	A	首尾一貫感覚尺度

*A: 学生 B: 指導者 C: 教員

**A: 学生 B: 指導者 C: 教員 D: 実習過程 E: 実習環境

表2 評価者と評価対象別の文献数 (文献の重複あり)

	評価者		
	教員	指導者	学生
教員	1		3
指導者		6	14
学生			45
実習過程		1	14
実習環境			1

学生14件, 指導者 (自己評価) 6件であった。評価尺度は, 前者のうち11件がECTB, 3件が授業過程評価スケール—看護学実習用—であり, 後者は全てECTBが用いられていた。

学生を評価対象とした文献は, 全て学生が自己評価を行ったものであり, 1文献に対し1～11の尺度を用いるなど多岐にわたっていた。

これらの尺度を高瀬ら³⁾ が分類した看護実践能力の3要素に分別した結果, ≪個人適正≫を評価する

尺度が43種類、《専門的姿勢・行動》、《専門知識と技術に基づいたケア能力》の要素を評価する尺度がそれぞれ6種類であった。

《個人適正》を評価したものとして特に多かった評価尺度には、対人関係を円滑に運ぶための技能である『社会的スキル尺度』が8件、自己遂行可能感である『一般的セルフ・エフィカシー尺度（以下GSES）』が6件あった。《専門的姿勢・行動》では、『実習適応感尺度』4件が多く、《専門知識と技術に基づいたケア能力》では、伝達したり応答する技能である『コミュニケーション技術評価スケール』や適切な基準や根拠に基づく、論理的な思考である『クリニカルシンキング能力の自己評価尺度』が1件ずつみられた。また、複数の尺度を用いている文献において、看護実践能力の3要素全てを組み合わせた文献は1件（No. 66）であった。

実習過程を評価対象とした文献では、評価者が学生であった文献が14件、指導者が1件であり、評価尺度は全て授業過程評価スケール—看護学実習用—が用いられていた。1件のみ確認された実習環境を評価した文献における評価者は学生であり、CLESが用いられていた。

教員を評価した文献は4件あり、全て2011年以降に確認された。指導者を評価した文献は20件あり、2005年から確認でき、2009年以降増加していた。学生を評価した文献は45件あり、2005年からほぼ毎年みられているが、2012年～2014年は少なかった。実習過程を評価した文献は15件あり、2005年から概ね毎年確認された。実習環境を評価した文献は2013年の1件であった。

4. 評価の範囲と時期

評価の範囲・時期について、まず領域を超えた追跡調査を行っている文献は次の4件のみであった。基礎実習後、全ての領域別実習前後の3時点で評価した文献として、唯一学生の自尊感情の評価（No. 47）があった。またこれに近いものとして、①基礎実習後、②全ての領域別実習前、③前期の領域別実習終了後の3時点で評価した文献として、学生の安全意識の評価（No. 71）があった。学生の行動統制の主体となる認識となる『Locus of Control（以下、LOC）』（No. 66）と学生の健康保持機能、ストレス対処機能が発揮される『首尾一貫感覚 Sense of Coherence（以下、SOC）』（No. 73）は、①全ての領域別実習前、②

全ての領域別実習終了後の2時点で評価していた。

次に、領域内で追跡調査を行っている文献は18件あった。まず①演習前、②演習後、③実習後の3時点の評価した文献は学生の自己効力感を評価（No. 20）、対人感情を評価（No. 41）の2件であった。また、ある領域の①実習前、②実習後の2時点の評価した文献は16件あり、いずれも学生の自己評価を行ったものであった（No. 1, 4, 11, 22, 24, 27, 29, 30, 31, 37, 43, 49, 50, 55, 58, 70）。そのうち特に多かった領域は、精神領域7件、基礎領域4件であった。

なお、複数の教育施設を対象とした文献は5件あり、質問紙の配布対象となった学校数は、4校（No. 11）、13校（No. 68）、7校（No. 46）、5校（No. 73）、2校（No. 25）、全て学生の自己評価を行った研究であった。

考 察

1. 評価対象別の研究動向

本研究の分析対象とした2015年までの約10年間における73文献のうち、評価の対象者が教員である文献は4件、指導者は20件、学生は45件であった。検索式に若干の違いはあるものの、2009年までの5年間の文献を検討した阿部²⁾の報告と比べると、この3者の比率は、指導者を評価対象とした文献が倍増し、一方で学生を評価対象とした文献がやや減少、教員を評価した文献は半減している。教員を評価対象とした文献の内訳について、本研究の結果では、評価者が学生であるものが3件、教員（自己評価）が1件であったが、この件数は阿部²⁾の報告と同数である。以上のことから、教員を評価対象とした原著論文は依然として少ない現状が明らかとなった。

2. 評価尺度および評価範囲・時期

教授者の能力を評価する尺度には、授業過程評価スケール—看護学実習用—やECTBを使用しており、一定の傾向が確認できた。また、看護学では、他学問の領域で開発された尺度の活用や看護独自の尺度開発が進められてきている。看護基礎教育での教育評価や実践における看護場面の判断とその検証に活用されていることも確認できた⁵⁾。

学生を評価対象とした文献は、全て学生の自己評価によるものであり、経年的に文献全体の6割から8割を占めていた。ただし、その評価内容を高瀬ら³⁾

の看護実践能力の3要素で分析すると、個人適性（性格や認知・思考力）に関するものが7割以上を占めており、その看護実践能力の3要素を網羅するような研究方法をとっていた文献は僅かであった。高瀬ら³⁾は、看護実践能力を「看護実践における専門的責任を果たすために必要な個人適性、専門的姿勢・行動、そして専門的知識と技術に基づいたケア能力という一連の属性を効果的に発揮できる能力」と定義づけている。これに基づく、看護実践能力における要素別の研究は多数行われており、尺度を組み合わせて実践能力の評価を行っていた。そのため、看護実践能力を包括的に評価できる尺度は確認できなかった。

包括的に看護実践能力を評価できる評価尺度^{6,7)}は存在しており、尺度開発も進められている。評価対象は看護師であり、看護学生を対象とした文献は確認できなかった。

よって、看護学生は学修者のため、主体性を尊重した尺度が使用されており、看護実践能力の3要素別の尺度を組み合わせて用いることで看護実践能力に結びついていくことが明らかになった。また、評価尺度や評価範囲と時期を選択していく上で、看護実践能力の向上に影響を与えている要因にも視点を広げて関わるのが大切であると考ええる。

結 論

1. 使用されている評価尺度は55種類あり、1文献に対し1～11の尺度を用いるなど多岐にわたっていた。

2. 看護学実習の教育評価に関する研究動向を分析したところ、教授者を評価対象とした文献の多くが指導者を評価したものであり、教員を評価したものは僅かであった。

3. 学生を評価対象とした文献は、全て学生の自己評価であり、文献全体の6割から8割を占めていた。

4. 教授者の教育能力を評価する尺度には、授業過程評価スケール—看護学実習用—やECTBを用いる一定の傾向が確認された。

5. 看護実践能力における要素別の研究は多数行われており、個人適性、専門的姿勢・行動、そして専門的知識と技術に基づいたケア能力の評価尺度を組み合わせて実習を評価している。

6. 評価の時期は、基礎実習後と領域実習の前後などで2時点から3時点で実施されていた。基礎看護実習から全ての実習終了後までなど一連の過程を通じた学生の評価に関する研究は見当たらなかった。

利益相反

本研究に関し開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) 厚生労働省. 看護教育の内容及方法に関する検討会報告書. 平成23年2月28日. (2016年2月26日アクセス) <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000013l0q-att/2r98520000013l4m.pdf>
- 2) 阿部オリエ. 看護学実習における評価に関する文献検討. 日赤九州国際看護大 *Intramural Res Rep.* 2009;7:51-56.
- 3) 高瀬美由紀, 寺岡幸子, 宮腰由紀子, ほか. 看護実践能力に関する概念分析 国外文献のレビューを通して. 日看研会誌. 2011;34:103-109.
- 4) 舟島なをみ, 亀岡智美, 定廣和香子, ほか. 授業過程評価スケール—看護学実習用—. 看護実践・教育のための測定用具ファイル 開発過程から活用の実際まで. 第3版. 東京: 医学書院; 2015. pp160-168.
- 5) 定廣和香子, 舟島なをみ. 「実習安全のための教授活動自己評価尺度—看護学教員用—」の開発信頼性・妥当性の検証. 看教研. 2016;25:10-11.
- 6) 丸山育子, 松成裕子, 中山洋子, ほか. 看護系大学卒業の看護師の看護実践能力を測定する「看護実践能力自己評価尺度 (CNCSS)」の適合度の検討. 福島医大看紀. 2011;13:11-18.
- 7) 松谷美和子, 三浦友理子, 平林優子, ほか. 看護実践能力 概念, 構造, および評価. 聖路加看会誌. 2010;14:18-28.

EXAMINING THE LITERATURE ON THE EVALUATION SCALE OF PRACTICAL TRAINING IN NURSING

Kiiko KOMATSUZAKI^{*1, 2)}, Mamiko YAMADA^{1, 3)}, Tomoko FUKUMIYA^{1, 4)},
Yoko SATO^{1, 3)}, Aya YAMAZAKI³⁾, Junko WATANABE^{1, 5)}
and Harumi FUKUCHIMOTO^{1, 6)}

Abstract — This study clarifies the trend of evaluation scales for clinical practice by nursing students. This study will be used as material to evaluate both, the educational abilities of professors and the practical nursing abilities of students, in clinical practice. The search method was based on the Medical Journal (ICHUSHI) Web Ver. 5, with the search period from January 2005 to September 2015. The search was limited to original articles with the terms "clinical practice," "nursing students," and "evaluation." Among the articles, those that used scales to evaluate nursing practice were included in the analysis. Those that used only original questionnaires were excluded. As a result, 1,132 articles were extracted. Of these, 73 were applicable to the conditions of this study. There were 55 types of evaluation scales used, and a wide variety of scales from 1 to 11 per article. The evaluators were classified into three categories: teachers, instructors, and students. The evaluation targets were classified into five categories: teachers, instructors, students, practice processes (general practice), and practice environment. Among the literature that assessed people, the four references that assessed teachers were the fewest, and all of them were identified after 2011. There were 20 references that evaluated instructors and 45 references that evaluated students, which were confirmed in 2005. Of the documents that evaluated instructors, three used the Japanese version of the Effective Clinical Teaching Behaviors (ECTB) for students and one used the Scale of Clinical Teaching Behaviors (SCTB) for nursing practice for instructors (self-evaluation). As for the raters and rating scales in the literature that assessed instructors, 11 of the 14 student evaluations were ECTB, three were SCTB, and six instructors (self-assessment) were ECTB. In recent studies on educational evaluation in nursing practice, the commonality of the SCTB and ECTB was confirmed as a scale for evaluating the educational practice ability of professors. However, only a few studies have evaluated teachers. In addition, those evaluations were conducted at two or three points in time; for instance, after basic practice and before and after domain practice. There were no studies on student evaluations throughout the entire process, which could have been conducted from basic nursing practice to after the completion of all practices. Finally, it was found that the students evaluated their practical training by combining the evaluation scales for each component of their practical nursing skills.

Key words: nursing science, practice, evaluation index

[Received November 29, 2016 : Accepted June 22, 2020]

¹⁾Department of Nursing, Showa University School of Nursing & Rehabilitation Sciences

²⁾Department of Nursing, Showa University Fujigaoka Hospital

³⁾Department of Nursing, Showa University Hospital

⁴⁾Department of Nursing, Showa University Hospital East branch

⁵⁾Department of Nursing, Showa University Karasuyama Hospital

⁶⁾Department of Nursing, Showa University Koto Toyosu Hospital

* To whom corresponding should be addressed